

川中島の戦い

両雄が戦った
本当の理由



3年 B組

鈴木 順夫

目次

はじめに

第一章 武田信玄による信濃侵略

一

一

11

一

一

15

一

一

24

二

一

32

一

一

34

第二章

川中島の戦いへ

39

第三章

合戦における両者のかけひき

二
一
一

二
一
二

二
一
三

二
一
四

二
一
五

三
一
一

三
一
二

三
一
三

三
一
四

39

44

50

55

63

67

67

71

85

94

第四章 合戦を通しこの両者の戦略 | 97

四 | 一 | 97

四 | 二 | 101

四 | 三 | 104

結論 | 109

参考文献 | 113

ーはじめにー

親戚の家が長野市の篠ノ井にある。ここから車で程遠くないところに海津城があり、一昨年、同じ労作展で日本の城について研究した際に訪れたことがあった。そのとき、海津城が川中島の戦いの時期に造られた城であること、有名なキツツキ戦法の舞台であることを知った。また、他にさ八幡原史跡公園や、山本勘助の墓など川中島の戦いに関連した史跡が近くにたくさんあることを知り、日本史

上有名な川中島の戦いについて興味をもち、調べこみることにした。

一四六七年、京都で応仁の乱が起きてから、約一〇〇年間、戦国時代と呼ばれる時代が続いた。戦国時代は、各地域で戦国大名が勢力を伸ばし、城や砦を築き独自の支配を行った時代である。その中で、領土拡大のために隣国へと侵攻したり、天下に号令をかけようと上洛したりするような有力な大名も登場した。越後国の長尾景虎、甲斐国の武田晴信はその

代表格だろう。(景虎は以後上杉政を名のり、
 上杉政虎、輝虎、謙信と改名する。また、晴
 信も信玄と名のるのは仏門に入った永禄二年
 頃からであるが、混乱を避けるため、上杉謙
 信、武田信玄と統一して表記する。)その両者
 が北信濃をめぐる直接戦ったのが、川中島
 の戦いである。川中島の戦いは、天文二十二
 年(一五五三)から永禄七年(一五六四)ま
 での間に五回の合戦があった。五回とも、犀
 川と千曲川の合流する川中島平で合戦が繰り

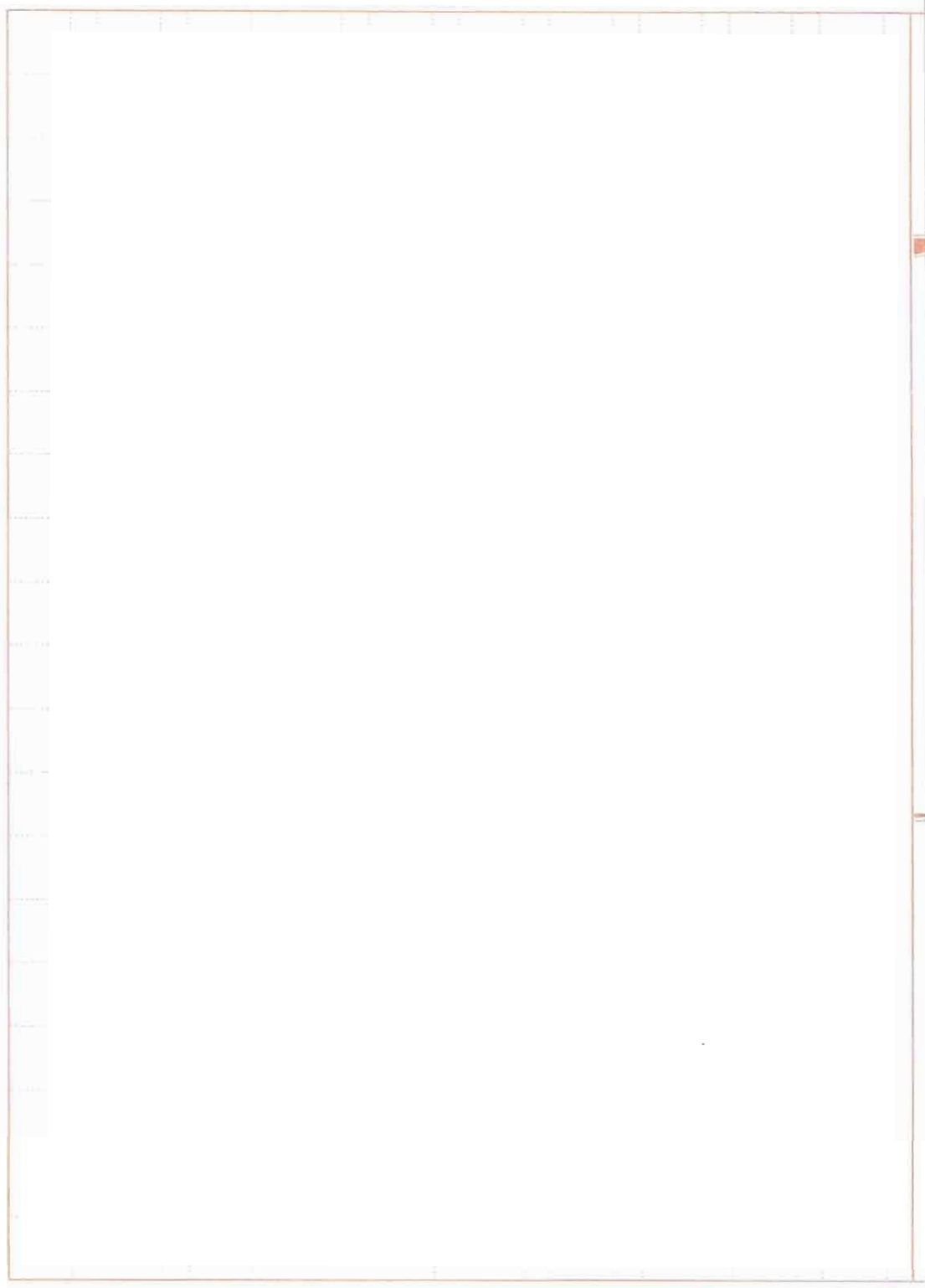
広げられた(図1)。

では、なぜ甲越の両雄は川中島に五度も戦うことになったのか。そもそも、謙信や信玄が家督を継いだ当時、両者はそれぞれ越後四十万石、甲斐二十万石の領主にすぎず、信濃国は守護小笠原氏、諏訪氏、村上氏や高梨氏が勢力を保っていた。それが、一五六八年には信濃のほぼ全域が武田氏の支配下となり、野尻、飯山の北信の一部が上杉氏の勢力下となりてくる(図2)。つまり、謙信と信玄は

川中島の戦いを通して信濃に進出し、ついに
 ののである。

先に信濃への侵攻を開始したのは信玄の方
 である。つまり、信玄の信濃侵攻が川中島の
 戦いの一つの引き金となつてゐることは間違
 いない。本研究では、合戦に至つた経緯から
 両者の動き、戦略まづを分析し、甲越の両雄
 が何を求め、川中島の地で戦つたのかを明ら
 かにする。

10



川中島の戦いを調べる



第一章 武田信玄による信濃侵略

一 諏訪地方への進出

武田信玄が信濃侵略の第一歩として進出したのは諏訪であつた。→ 諏訪では頼満の代に諏訪氏が下社の金利氏を倒して諏訪郡を統一した。しかし諏訪も当時の異常気候によつて連年風水害を受け入々は疲弊してゐた。それにもかかわらず頼重は連続して軍を動かしたため、人心は次第に頼重から離れてゐた。また高遠には諏訪一族の高遠頼継がいたが、

彼は自分の家が本来諏訪氏の総領職を継ぐべきだと考え、機会があつたら頼重に取つて代わろうとしていた。この頼継に諏訪上社称宜大夫、矢島満清も勢力を伸ばそうと結び付いた。また一旦諏訪氏の支配下に入つた下社の金刺氏も、勢力の回復をねらつていた。とあるように、信玄にとつて諏訪へ侵攻する絶好の機会だつた。

天文十一年、武田軍が諏訪の長峰、田沢に陣を置き、高遠軍も杖突峠を越え、諏訪に侵

入し安国寺周辺に放火した。これに対し、諏訪頼重は上原城を捨てる桑原城に入るが、城を包囲され和議の申し入れを受けず開城した。一四三〇年頼重は甲府に連行されず切腹し、諏訪氏は滅んだため、宮川を境にし、西は高遠頼継領、東は武田領となった。

しかし、これを不服に思った高遠頼継は、箕輪に勢力をもつ藤沢頼親、矢島満清、上伊那の国人衆と連合して、天文十一年九月一日に挙兵した。頼継は、武田領となつていた

上原城を攻撃し、諏訪上社・下社を占領した。
 これに対し信玄は、諏訪頼重の遺児である虎
 王丸を擁立し、諏訪氏の遺臣たちを味方につ
 けた。同年九月二五日、宮川の戦いで武田軍
 は高遠軍を破った。高遠頼継は敗走し、藤沢
 頼親も福与城を攻められ降伏した（図4）。
 しかし再び高遠頼継と手を結んだため、天
 文十三年、武田軍は福与城に近い荒神山城を
 攻めたが、高遠頼継がこれを支援したため落
 とせなかつた。翌年四月十一日、信玄は自ら

大軍を率いて杖突峠に陣ると、高遠頼継は城を捨てて逃亡した。また、藤沢頼親も小笠原長時の援軍が籠る竜ヶ崎城が落城すると武田方に降伏した（四五）。これにより、諏訪に加えて上伊那地方も武田の支配下となり、諏訪一帯は板垣信方が郡代として上原城で統治を行つた。

一、二、佐久地方への進出

信玄は諏訪を平定すると佐久地方への侵入

を開始した。

天文十二年九月九日、甲府を出発した信玄は、同月十七日に大井郷に勢力をもつ大井貞隆を攻め長窪城を落とした。しかし、大井貞隆の子の貞清が内山城に籠り抵抗を続けたので、翌天文十五年五月六日に前山城に入り、攻撃を開始する。同月十日には敵の水の手を切り、十四日には本丸まで迫ったため、貞清は城を明け渡して降伏した（図6）。

こうして信玄は次々に佐久を支配下に入れ

といつたが、志賀城の笠原清繁は西上野の豪族や関東管領上杉憲政と協力して、最後まで信玄に抵抗した。それは次の通りである。

天文一六年七月一八日、信玄は志賀城攻撃のための軍を動かして、自身も一三日に出馬して二〇日に桜井山城（白田町）に着いた。一方、志賀城へも親戚の上野国菅原（群馬県妙義町）の城主高田憲頼が、一族の高田右衛門佐父子を将として援軍を入れた。武田軍は二四日午前六時頃から攻撃を開始し、正午頃ま

で激しく攻め立て、翌日には水の手を切った。山城で水の手を切れれば先は見えてくる。しかも武田方にはこの日、小笠原氏や山家氏などの援軍も加わった。笠原軍はよく持ち堪えながら上杉憲政に救援を求めた。これに応じると金井秀景の率いる上野軍が小田井原へ北佐又郡御代田町へまど来たが、武田軍ではこれを板垣信方・甘利虎泰・横田高松・多田三八などが迎え撃ち、八月六日に大将格一四、五人と雑兵三〇〇〇人ばかりを討ち取って上野軍

を潰走させた。武田勢はこの戦いで討ち取つた首を志賀城のまわりに並べ、城兵の士気を喪失させた。そのうえ立て籠つていた兵たちは長い間水不足で苦しんでいた。結局一日、城主父子や城兵三〇〇人ばかりが討ち死にした。城は陥落した。(四六)

こうして完全に佐久を掌握した信玄は、坂木の豪族である村上義清と領域を接することになる。

天文十七年二月一日、信玄は坂木の葛尾城

向けて出陣し、上田原の産川東に陣を置いた。
 義清も天白山を背に、浦野川沿いに陣を張つ
 た（一回々）。両軍は同年二月十四日、上田原
 で激突した。戦いについて、武田軍の先鋒
 だつた板垣信方が緒戦では村上軍を圧倒し
 かし、あまりにも突出しすぎたため村上軍に
 包囲され、信方は戦死してしまふ。先鋒の崩
 れが武田軍全体に波及し、総崩れとなつてし
 まつた^{L2}とあり、武田方は、板垣信方、甘利
 虎泰、才間河内守、初鹿野伝右衛門といつた

名だたる武將が討ち死にした。一方で、村上軍への損害も大きく、合戦後二十日あまりに渡つて軍を動かさなかつた武田軍を追撃することばできなかつた。

しかし、武田信玄が敗北を喫したことよ、村上義清は、府中の小笠原氏、大町の仁科氏の軍とともに四月五日に諏訪地方に乱入した。そして二五日には武田氏の佐久地方の前進基地である内山城に放火して、過半を焼いた。また前山城も佐久衆が武田氏の手から取

り戻した^レとあるように、信玄の信濃支配は一時的に後退する（四〇）。

余談だが、この上田原の戦いについて、地の利を知り尽くした村上軍に武田軍は惨敗した、と書かれてゐる文献が多い。村上勢の諏訪侵入などまで含めれば義清の大勝であるが、合戦だけをみれば決して大勝とはいえない。また、平地での合戦で地の利が働く可能性は低い。したがって、僕はこの合戦を次のように推測する。武田軍の先鋒が突出しすぎたこ

と、先鋒が包圍されると総崩れしたことを考
えると、信玄は魚鱗の陣を敷いたと思われ
敵に対し、矛先が長いが密集度が薄いことが
特徴である（四ヶ）。一方、村上軍は武田軍
を包圍したこと、魚鱗の陣に対し、使われる
ことが多いことを考えると、鶴翼の陣を敷い
た可能性が高い。つまり、勝敗を左右したの
は、地の利などではなく戦術だったと僕は考
える。

一三、筑摩、小県への進出

林城を拠点に、当時、筑摩郡や安曇郡に勢力をもつていた小笠原氏は、上田原の戦いでは信玄が負けたのを機に諏訪へ侵入した。これを聞いた信玄は七月十一日に甲府を発ったが、進軍は非常に遅く、諏訪に入ったのは同月十八日だった。しかし、翌日早朝、塩尻峠に陣を置いた小笠原軍を急襲し、武田軍は勝利をあげた。その後、林城の南約八キロメートルのところ、村井城を築き、天文十九年には

小笠原方の侍衆の寝返りもあり、戦わずして多くの城が落ちたため、信玄は府中を支配下に置くようになる。小笠原長時は平瀬城に逃げ、信玄は小笠原氏の居城だった林城を破壊し、深志城の修築を開始した。後の松本城となるこの城は、信玄の松本平支配の拠点となった。

信玄は同じ頃、佐久地方の平定を行つた。天文十七年八月、塩尻峠の戦いで体制を立て直した信玄は小山田信有を大將に佐久の

田野口城を攻撃するが敗退した。そのため、
 九月六日信玄みずから諏訪を立ち、佐久郡
 前山城（佐久市）を目指して矢戸（山梨県大
 泉村）に陣を張った。翌日は海河口（南佐久
 郡南牧村）、九日に宮ノ上（同小海町）を陣
 所にし、一日午前八時頃に白田（同白田町）
 を出、大雨の中を前山城を攻め落して数百人
 を討ち取ったので、恐れをなした近辺の一三
 の城に立ち籠つていた兵たちは皆城を開いて
 逃亡してしまつた。（中略）翌天文一八年の

八月二三日、信玄は諏訪の高島城を出馬して
二三日に榊井山城（白田町）に入り、二八日
に御井立に放火した。続いて九月一日鷺林（
佐久市）に陣取り、四日には平原城（小諸市）
に放火して、二一日に甲府へ帰った。¹（四〇）
これらの軍事行動により、佐久は再び武田方
の支配下に入った。

天文十九年八月、松本平を手中におさめた
信玄は、村上方の支城である砥石城攻略に取
りかかった。この時、村上義清は北信濃の豪

族の高梨政頼と対峙しており、五〇〇人の城
兵は孤女無援の状態にあつたが、決して城か
ら打つて出ることなく武田軍の攻撃を防いで
いた。一方、武田軍は苦戦を強いられ、
大軍で力攻めを行うが曲輪すら落とせな
かつた。信玄の大軍が砥石城に押し寄せた
報せを受けた義清は、即座に高梨政頼と和睦
を成立させた。すぐさま葛尾城にとつて返し
救援の兵を編制したが、その報せは信玄の元
には届いていなかった。九月九日になつて、

信玄は砥石城全体に総攻撃を開始。大手道か
 ら攻め上がり、本城と他の曲輪との間を寸断
 しようとしたが撃退されてしまった。その同
 じ日、村上義清の本隊が葛尾城を出撃して砥
 石に向かっている報告がもたらされる。信玄
 は城兵と救援部隊に挟撃される危険を察知し
 て、すぐさま撤退を開始した。しかし、義清
 の進出の方が早かった。義清の部隊が突撃を
 開始すると同時に、砥石城の城兵も打って出
 て武田軍を挟撃する。撤退にかかっていた武

田軍は、たちまちのうちに崩れ去いく。殿軍の横田備中が義清の攻撃の前に立ち塞がるが、ついに戦死して武田軍は総崩れになつてしまふ。二（四一〇）とあるが、二千人も死者を出したこの敗戦は、のちに砥石崩れと呼ばれるようになる。

天文十九年九月九日、信玄の敗戦を知つた小笠原長時は、深志城を取り戻すべく平瀬城に入る。しかし、天文二十年五月十六日、砥石城が真田幸隆によつて落城する。信玄は、

十月に深志城に入り、同月二十四日には平瀬城を落とし、二十七日に小岩嶽城に放火した。翌天文二十一年八月には小岩嶽城も落城し、信玄は安曇、筑摩のほぼ全域を勢力下に置くようになつた（四川）。

では、なぜ砥石城は落城したのだらうか。信玄自ら五千の大軍で力攻めをして落とせなかつた城を、真田幸隆が真正面から攻撃して落としたとは考えにくい。『高白斎記』には、
 「砥石ノ城真田乗取」とある。
 「乗取」とい

うことから、真田幸隆は内部工作を行つて敵の兵力を減らし、奇襲攻撃をかけた城を取つたと推測される。この砥石落城が戦況を変えたことは事実だらう。

一―四、村上義清の没落

砥石城を落とし、中信地方も支配下におさめた信玄は、天文二十二年、葛尾城の村上義清を攻撃するため軍勢を集めた。村上義清の本城葛尾の大手は急坂の連続、南には大軍

の進軍困難な岩鼻があり、難攻不落の要害だ
 った。ところが搦手の戸倉からは馬も登れる
 容易な道だった。三月に晴信は信濃に出陣、
 深志で軍略を練り、麻績から戸倉へぬけて攻
 めようと、道筋の諸城を攻略した。晴信は義
 清に二度も敗北しているため、更埴地方の諸
 士にいろいろと工作をしていた。四月五日、
 村上支族で重臣の屋代氏、千曲川左岸の塩崎
 氏が晴信に同心し、麻績からの道筋の桑原が
 安全に通れると報じてきた。このことに加え、屋

代、塩崎両氏の離反は、北信濃、川中島方面からの援軍が通れないうことを意味した。さらに、葛尾城の対岸の狐落城が落城したため、義清は四面楚歌と化した（四二）。戦意を喪失した義清は、四月九日、葛尾城に火を放ち、北信の高梨政頼、さらには越後の上杉謙信を頼って逃げた。

一五、なぜ信玄は信濃へ進出したのか

ここまで、武田信玄による信濃進出の詳細

にういて記述した。では、なぜ信玄はとこま
で信濃にこだわつたのか。理由はいくつか考
えられる。

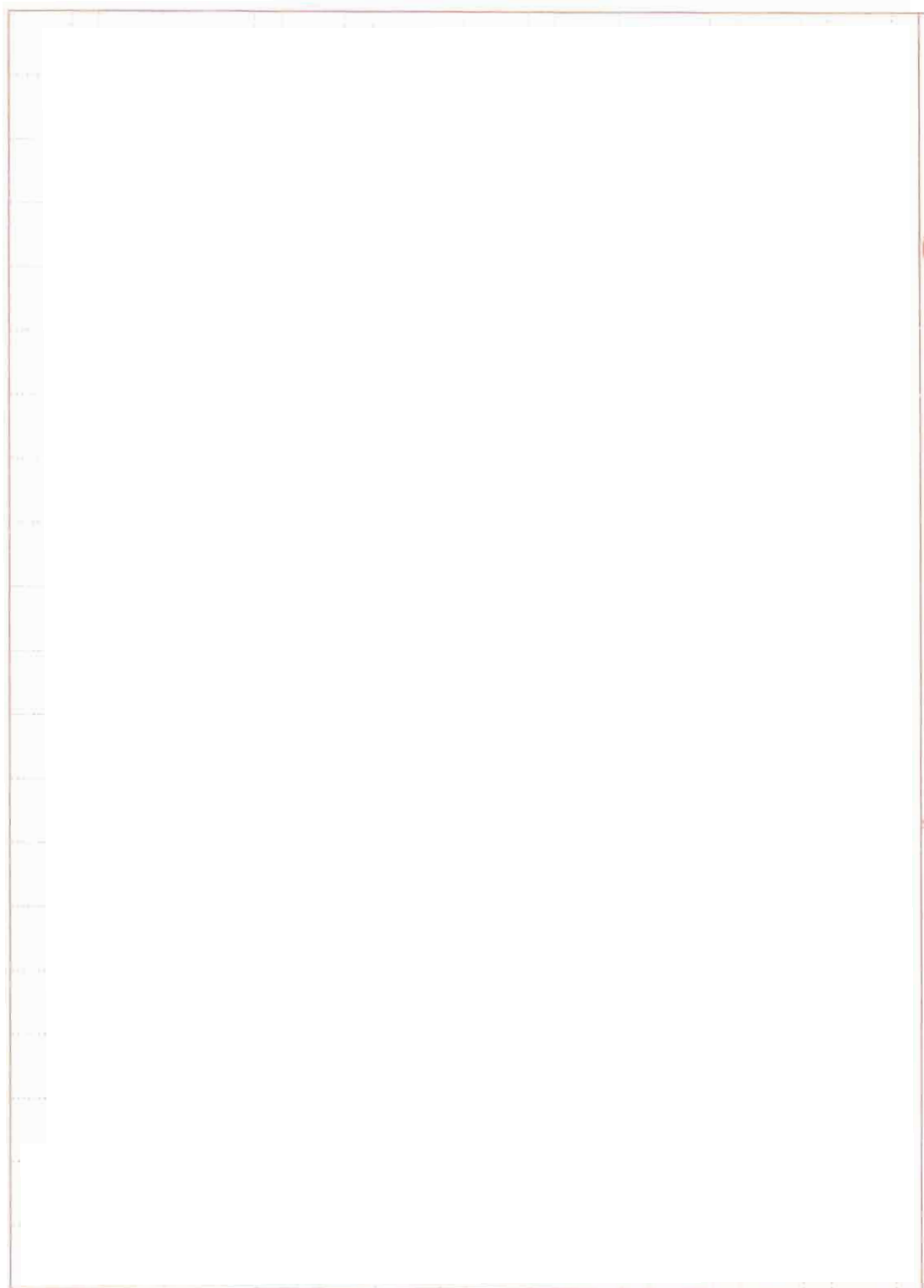
「信玄の支配する甲斐は、四方を山に囲ま
れ、他国からの侵入口といえは、南は駿河口、
北に信濃口があるだけ。東も西も、峻険な山
も越えねばならない。狭く、防備に適した利
点はあるが、鬱陶しいような盆地で、米の穫
れ高はわずか二十万石。貧しい国といえる。
北に控える四十万石の生産量をもつ信濃の平

野を、わがものに占領しないことには、甲斐
 は軍事的にも経済的にも、自立が困難であつ
 たのである。そこで信玄は当面の基本戦略を、
 武蔵相模の北条と駿河の今川とは平和状態を
 維持し、国の南と東を安全にし、西と北の信
 濃豪族を各個撃破することにおいた。(中略)
 そこを領土とすることが、やがて京へ風林火
 山の旗をすすめるための必須の条件であつた
 のである。⁴ というように、上洛するための備
 えというのが一つめの理由である。信濃を支

配下に置いて十分な勢力を確保し、さらに上杉謙信を牽制した上が上洛しようとしたのだらうか。

また、甲斐への侵入口が二つしかないということは進出口も二つである。その場合、駿河に進出するのは当時の武田氏の勢力では難しく、小領主の割拠していた信濃は勢力を伸ばすところがなかつたとも考えられる。

28



第二章 川中島の戦いへ

二一、第一次川中島の戦い

天文二十二年四月九日に葛尾城を捨て、越後へ逃亡した村上義清は、高梨政頼や上杉軍に援助され、同月二十一日、更級郡に侵入した。武田軍の先鋒を八幡辺りで破り、翌日に葛尾城を奪還した。その後、義清は塩田城に入り再起を図った。義清が塩田城で再挙を計っていたことを知った晴信は、天文二十二年（一五五三）六月諸將と攻撃の軍議をすま

せ、準備を進めた。七月末甲府を出て三十日に望月城に泊まった。八月一日長窪（長和町）に陣を置き、和田城攻めをおこなひ城主以下を皆殺しにし、四日に高鳥屋城（上田市武石）に籠城していた全員を討取った。内村城（上田市丸子）も落ち、武田軍の皆殺し戦法は、この地方の武士達に恐怖を与えたことは事実ぞ、自落する城も多かつた。周囲の諸城を落とした晴信は、五日に塩田城への攻撃を開始している。義清の頼みの越後からの援軍は、

砥石城が真田幸隆・昌幸に押さええられ、地蔵峠麓の尼飾城を同人らが攻めといたから、塩田へ進入することは期待できなかつた。そのため義清は塩田城を脱出し、再び北方へ逃れた⁴³（四三）というこの敗走が、川中島の戦いの引き金となつた。

再度村上義清を越後に追いやつた信玄は、さらに川中島付近まで兵を進めた。これに対し、村上義清、高梨政頼をはじめ井上氏、須田氏、栗田氏といった北信濃の豪族たちに援

助を要請された上杉謙信は、天文二十二年八月末信濃に出陣した。まず、更級郡の布施で武田軍の先鋒と戦い、九月一日には八幡で武田軍に勝利した。荒砥城が自落すると、上杉軍は筑摩郡青柳に放火し、四日には虚空蔵山城を落とした(四々)。

これに対して、上杉信玄もまた甲斐から出撃し、大軍を率いて北信濃へと侵攻する。青柳城を包囲中だった謙信は、ただちに兵を川中島の八幡原まで下げ、信玄の本隊に決戦を挑

もうとした。信玄も一度は八幡原に入り、そ
 こで前衛同士が小競り合いを起す。この戦い
 では上杉軍が圧倒して、武田軍は八幡原から
 兵を撤退させたという説もある。八幡原での
 戦いは大規模なものにはならず、信玄は本隊
 を率いて葛尾城の南方にあつた塩田城に入
 った。そこから動こうとはせず、籠城の態勢に
 入つた^とある(四は)。信玄が小泉郡の塩
 田城まで兵を引いたことで、葛尾城以北の土
 地は武田軍の支配から解放された。謙信は、

その土地を北信の豪族たちに分配したが、九月二〇日に上杉軍が撤退すると、再び武田軍による侵略を受けらるようになった。

二―二、第二次川中島の戦い

第一次川中島の戦いの後、信玄は、関東の北条氏康、駿河の今川義元と甲相駿三国同盟を締結した。その過程は次の通りである。

これより先の天文六年（一五三七）武田信虎の娘が駿河の今川義元のもとに嫁いだが、

彼女は天文十九年に亡くなった。そこで天文二一年義元の娘が信玄の長男の義信に嫁ぎ、今川と武田との間に同盟が結ばれることになった。ところで、今川氏と後北条氏との間は元来親密な姻戚関係があったが、義元の代になつてから両者の関係が悪化した。しかし天文一四年一〇月、武田信玄の斡旋によつて和睦が成された。その後今川、北条の間で婚約が決められた。一方、天文二二年には武田信玄と北条氏康との間で両家の婚約が誓約され

た。天文二三年七月、まず北条氏康の娘が今川氏真のもとに嫁いだ。次いで一二月に信玄の娘が北条氏政のもとへ縁づいた。こうして武田・今川・北条の姻戚関係を前提とする同盟が成立したのである。これによつて、信玄は甲斐の南と東側に同盟者を得ることとなり、兵力のほとんども信濃に送ることが可能となった。信玄が戦略的優位に立つたといえる。

(四七) 一方で、謙信は、天文二十二年秋に上洛を果たし後奈良天皇から盃と剣を賜わり、

越後および隣国の敵を平定する大義名分を得
た。

天文二十三年十二月、信玄は、上杉方の家
臣である北条高広の母とに甘利昌忠を派遣し
た。北条高広は、以前から武田方への内応の
意を示しており、北条城で挙兵した。翌天文
二十四年二月に謙信は北条城を攻撃し、降伏
させたが、その間に武田軍が善光寺平まで勢
力を伸ばしたため、四月十八日、信濃へ侵入
した。上杉軍は、武田方に属する城や砦を次

々に落とし、粟田城を攻略したのち、七月には横山城に陣を張り旭山城を攻撃した。旭山城には、善光寺小御堂主の粟田鶴寿が三千の兵を籠つていた。

これに対し、武田信玄は甲斐を起ち七月には川中島に陣を張つた。謙信も旭山城の攻撃を中止し、犀川を狭んで信玄と対峙した。その際、旭山城の北方に急造の城を築き、旭山城への備えとした。→七月十九日、武田軍と上杉軍は川中島で戦つた。謙信軍が犀川を渡

ろうとしたところを信玄の軍が迎え撃つたも
 のであろう。この戦いに際して出された感状
 は武田信玄のものが十通知られるのに対して、
 上杉謙信のものは一通しか知られない。この
 ことからすると武田方の勝利だったのだろう。
 とあるが、それ以降は両軍とも渡河しようとし
 せず、合戦に至らないまま長期間の対陣とな
 った。結局、信玄が今川義元に調停を依頼し、
 同年十月十五日に講和が成立した。講和条件
 は、上杉と武田の境界を犀川とし、それよ

り北方の信玄が攻略した土地をすべて返納す
 ぬ。旭山城は籠城を解いて破却し、これ以降
 は犀川を越えては決して兵を出さない²とい
 うもので、これを機に両軍は兵を撤退した。

(四七)

二一三、第三次川中島の戦い

弘治二年、越後では上杉謙信が突然引退す
 るという騒動が起きた。謙信は、守護の職を
 放棄し、出家したのちは高野山に向かうつも

りだつたといふが、長尾政景をはじめとする家臣の慰留により八月十七日に引退を取り消した。しかし、数ヶ月に渡つて政務は手つかずの状態に陥り、武田方の北信濃への侵略は大きく前進した。

弘治二年、武田方の家臣である高坂弾正は上杉方の葛山城、尼飾城を攻撃した。八月には真田幸隆が尼飾城を落とす。弘治三年二月十五日には、かねてから内応者かぶっていた葛山城が落城した。さらに、武田軍は飯山城の

高梨政頼を攻撃したため、政頼は謙信に救援を要請した（四十八）。

弘治三年四月十八日、謙信は信濃へ出陣し、同月二十一日、本陣を善光寺に置いた。山田要害、福島城など武田方に陥ちていた諸城を奪還した後、二十五日には旭山城を再興して本陣を移した。上杉軍は、一度飯山城に撤退し、五月十三日には坂木、岩鼻へ軍を進めるが、戦果をあげられず、七月になつて尼飾城を攻撃した。これに対し、信玄は本隊を北信

濃に向かわせらる一方、別働隊には、七月五日、北安曇郡の小谷城を攻略させ、越後糸魚川方面への進出ルートを確保した。㊦尼飾城を攻略中だった謙信はそこでいつたん兵を収め、善光寺方面に撤退。八月になつて、ようやくのことぞ進出してきた信玄の本隊を迎えるために、上野原まで進出する。信玄も上野原に入り、再び両軍の主力の睨み合いとなつた。しかし、ともに陣形をしつかりと保ち、決して相手に隙を見せようとほしなかつた。この

上野原の戦いがいつ始まり、いつ終わつたの
 かは、ほつきりした資料は残つてはいない。
 八月二十九日に両軍の激突があつたとき、主
 力同士がぶつかり合いにはならなかつたが、
 それなりに激しく戦つたようではある。¹²この
 上野原の戦いについては、八月二十九日付け
 の上杉謙信と長尾政景の感状、九月二十日の
 謙信の感状の三通から、八月に上野原で両軍
 の衝突があつた¹と考えられ、いふれも上杉
 軍の母のぞあること²から、数回に渡つて小競

り合いが起こり、上杉軍がやや優勢であつたと推測する。ただ、信玄自身は深志城で指揮をとつており、武田方がいつこうに動かないため、謙信は越後へ撤退した（四十九）。

この結果、川中島をはじめとする善光寺平一帯は、武田方の支配下に入ることとなつた。また、謙信の再来に備えて海津城が築城された。

二一四、第四次川中島の戦い

永禄二年、武田信玄は室町幕府第十三代将軍足利義輝より、信濃国守護職に補任された。応仁の乱以後、権威の低下に悩まされ、いた幕府が、上杉謙信と武田信玄を和睦させ、その力で幕府の権力を回復させようとしたからであった。また、謙信も同年四月に二度目の上洛を果たし、正式に関東管領に任命された。このことで両者ともに北信に進出する大義名分を得たといえる。

謙信が上洛のために長期間越後を留守にし

こいる間に、武田軍は北信濃の土地の大半を
 手に入れ、越後に侵入する構えまで見せた。
 さらに、越中の神保良春や加賀、越中の一向
 一揆勢とも手を結び、背後から越後を脅やか
 した。

永禄三年八月、謙信は関東に出陣し、上野
 国の厩橋城を拠点に武蔵、相模へと軍を進め、
 小田原城の北条氏康を攻撃した。この間、
 信玄は海津城に兵を集めたり、上野国の松井
 田へ出陣したりするなど、北条攻めが越後を

留守にして、いふ謙信を牽制する動きをとった。
 (四〇二〇)

永祿四年六月に関東から帰国した謙信は、
 同年八月になると、一万八千の大軍を率いて
 信濃へ進軍した。謙信にとつて、四回目の
 戦いの持つ意味はそれまで三回のものとは違
 つてい変した。これまで信濃への出兵につい
 て消極的であつた越後・阿賀野川以北のいわ
 ゆる阿賀北衆が参加したといふことだす。こ
 の背景には、謙信が関東管領に就任し、この

ことによつて越後国内における家格が急上昇したことにありといわれ、います^うとあり、このことから謙信がいかに多くの兵を動員したか伺える。

対する信玄も、高坂弾正ら三千の兵が籠る海津城救援のため、一万七千の大軍を信濃へ出陣した。上杉軍は八月十五日に妻女山に、武田軍は八月二十四日に茶白山に着陣した。しかし、信玄は八月二十九日に突如海津城に入城した。その後、しばらく対峙が続いたが、

九月九日、信玄は、別動隊に妻女山を急襲させ、上杉軍を八幡原に誘い出し、本隊と狭撃する作戦をとった。しかし、上杉軍は九月十日早朝、八幡原に進軍し、信玄本隊と激戦を繰り広げた。当初は上杉軍が優勢で、武田軍は中軍まで潰滅状態にあったが、妻女山方面からの別動隊が到着すると上杉軍は狭み撃ちされる形となり、善光寺へと撤退した（図21）。この合戦で、武田方は死者四〇〇〇人以上に加え、武田典厩信繁、諸角豊後守虎、初鹿

野源五郎、山本勘介といつた大将クラスを失
 い、信玄自身も数ヶ所の傷を負つた。また、
 上杉軍も三〇〇〇人近くの死者を出しており、
 両軍ともに大きな犠牲を払つた。

しかし、謙信は九月一三日にこの戦いご
 軍功を上げた者に感状を与えた。俗に血染の
 感状と呼ばれるものである。この感状では戦
 功を感謝し、親族や被官人の犠牲によつて、
 凶徒数千騎を討ち取り大勝した、この名譽と
 忠節は一生忘れないといつたことが記されて

いる。あくまでも戦功を誉めたたえるだけだ。恩賞としての物資的裏付けはなされてはいない。これに対し、信玄が一〇月一日に土屋豊前守にあてた感状では、型通りの文言とともに、謙信の勢力範囲ともいえる水内郡和田へ長野市東和田、西和田、長池へ同南長池・北長池へ二〇〇貫の地を与えると具体的な所領の宛行がなされている¹⁵とあり、この合戦を通じて北信濃への支配を強めたのは信玄といえる。

二一五、第五次川中島の戦い

第四次川中島の戦いの後、川中島一帯に加
え戸隠なども武田方の勢力範囲となり、上杉
方は野尻、飯山を支配するのみとなつた（図
一）。つ武田軍も関東への出兵を繰り返すも
のの、飯山や野尻湖などへの出兵も散発的に
行い、北信支配を完全なものとしようとした
のです。（中略）この年（永禄七年のこと）
の春、武田信玄は上杉謙信の関東出兵の留守
を狙つて野尻城を攻撃します。これに対して

上杉軍は応戦し野尻城の奪取に成功するのぞす^らとあり、武田方の挑発行為は行われまいたものの合戦には至らなかつた。

第五次川中島の戦いが起こつたのは次のような事情からである。この頃、飛騨国では桜洞城（岐阜県下呂市萩原町）の三木良親が広瀬高堂城（吉城郡国府町）の広瀬宗城と争つていたが、高原諏訪城（飛騨市）の江馬時盛は宗城を支援し、兩人が信玄に援助を依頼した。対する良頼は時盛の子の輝盛と結んで

謙信を頼つた。信玄が飯富（山県）昌景を派
 遣して宗城らを助けたので、信玄の勢力が飛
 驒に及べば越中までがねらわれ、背後から越
 後を突かれる危険も出てくるため、謙信は越
 中の武士たちに良頼らを援助させた。こうし
 た状況下で、謙信は川中島に出陣を決心した。⁵
 永祿七年八月、謙信は信濃へ出陣した。善
 光寺平の葛山城や海津城を攻めようとせず、
 深志方面から北上し、塩崎に陣取つた武田軍
 と対峙した。信玄は上杉軍と戦おうとせず、

謙信も武田方となつた土地で無理に攻撃をし
かけることができず、約六〇日の対陣が続い
た。しかし、謙信は関東に出兵するため十月
一日に春日山に撤退した。

こうして五度に渡る合戦は終わり、その後
は善光寺平で戦うことはなかつた。

川中島の戦いを考える



第三章 合戦における両者のかけひき

三十一、第一次〜第三次川中島の戦いの場合
 第一次川中島の戦いから第三次川中島の戦いにおける両者の行動には共通する点が多い。一つは、合戦のきつかけとなりてゐるのだが、信玄による北信濃への侵略行動にあるといふ点がある。天文二十二年の戦いは、村上義清の逃亡と北信豪族による謙信への救援要請が、天文二十四年の戦いでは、武田方による北条高広への内部工作、旭山城への進出が、弘治

三年の戦いでは、高坂弾正による葛山城、尾飾城攻略、飯山への進出が、それだけの合戦の引き金となつてゐる。

こつめは、謙信が信濃へ出陣した後の信玄の動きである。武田勢の北信侵略に對抗して信濃に出陣した謙信は、武田方に落ちた城を奪還しようとして城や砦を次々に攻撃する。しかし、信玄の軍が川中島に出陣するのはその直後ではなく、数ヶ月後である。天文二十四年の場合、謙信の信濃出陣は四月十八日である

が、信玄の川中島到着は七月になつてからで、弘治三年の場合は、謙信が四月に出陣したのに対し、武田軍の川中島到着は八月近くに、なつてからであり、このときは信玄は深志城で指揮をとつてゐる。このように、信玄は、上杉軍が川中島平諸城を攻略していく中、万事慎重に出陣を行つてゐる。さらに出陣した後も、天文二十二年の際には塩田城に籠り、天文二十四年の際には犀川まで出陣したものの二百日近く動かないことにみられるように、

謙信と一戦を交えようという気がない。謙信
 が放火したり軍を少し動かしたりして、信玄
 を挑発しても、信玄は軍を動かしてこない。
 では、なぜ信玄はなかなか軍を動かさない
 のか。「春日山から七十キロ、甲府から百六
 十キロ、兵站線の長さからいえば謙信がはる
 かに有利⁴（四二）であり、兵糧の供給や援
 軍の到来なども考えたときに、地理的優位に
 あるのは謙信である。しかし、越中の一向一
 揆や関東の北条氏康など、隣国に敵が多く国

内情勢もあり長い期間越後を留守にできない
謙信に対し、甲相駿三国同盟によつて後方の
安全を確保しており、信濃攻略に専念できる
信玄の方が戦略的優位にある。つまり、信玄
には謙信の出陣が長くないことが分かつてい
たため、決戦を避け、慎重に軍を動かしてい
たことが考えられる。

三十二、第四次川中島の戦いの場合

前述した通りの理由があり、弘治三年まで

の合戦は主力部隊どうしの大規模なものには
至らなかつたが、永禄四年の戦いでは八幡原
において激戦があつた。つまり、弘治二年ま
での三回の合戦とは違つた掛け引きが行われ
たといふことであらう。

八幡原での合戦に至るまでの詳しい経過に
ついては、日徹底分析川中島合戦区が分かり
やすいので参考にする。

永禄四年八月十四日に春日山を出撃した上
杉軍は、同月十六日に川中島に到着した。信

玄は海津城が陥落し、いか危惧し、謙信到着
 の二日後の八月十八日には甲府を起つた。武
 田信繁、飯富虎昌、馬場信春、小山田昌時、
 真田幸隆など赫々たる顔ぶれがそれに従つた。
 しかし、上杉軍は大軍をもち、海津城を攻め
 ようとはせず、大荷駄と五千の兵を残し、八
 千の兵が妻女山に陣を置いた。

まが、ここまでの謙信の行動について考え
 る。一つは、なぜ海津城を攻めなかつたのか
 といふこととある。海津城に籠つてゐるのは、

高坂弾正とわづか三千の兵であつた。普通に考えれば、海津城を攻め落として信玄本隊を迎え討つのが一般的な戦法である。しかし、謙信があえてそうしなかつたのは、一弱敵を攻むるは卑怯ということ⁴とあるように義を重んじたからだけではない。海津城は平城といえども三方を山に囲まれ前方を千曲川が流れる堅城であり、力攻めで落ちたとしても多くの死傷者が出る。また、城が落ちなかつた場合、城兵と信玄本隊に狭撃される危険性が

考えられ、これを避けたと推測できる。

もう一つは、なぜ妻女山に陣取ったかとい
うことである。これは、ついうまどもなく、

この時点で善光寺平は、犀川以南のすべそが
信玄の勢力下にあつた。そんな敵地の腹中深

くに身を挺⁴する行動である。謙信がなぜ、

そんな危険を冒してまで妻女山に陣を置いた

一つめの理由は、海津城の動きや、戦場にな

りうるであろう川中島全域が望めることであ

る。二つめの理由は、信玄の誘導だと推測が

くる。謙信が妻女山おさえたこと、海津城
 の退路や補給路は断たれたこととなる。こう
 することと信玄は、海津城救援のために進路
 を変えるのであろう。海津城へ至る道のうち、
 平曲川沿いに屋代から入る道は妻女山の上杉
 軍に防がれてゐるため、地蔵峠を越えて進軍
 してくると謙信は読んだのであろう。そこを
 待ち伏せして奇襲をかければ、狭い山道でもあ
 るため敵は潰滅するはずである。謙信はこの
 ような作戦をもつて妻女山に陣を置いたのだ

と推測する（図3）。

さて、そのような作戦をとつた上杉軍に対し、武田軍は、⁷松島から釜無川に沿い、上諏訪、和田峠をへて上田に出る、約百六十キロの行程を川中島に向つた⁴という。しかし、上田からは謙信の目々ろみ通りに地蔵峠へは進まず、⁷武田軍は、予定のコースを変更する。直行をやめ、室賀峠を越えて山田の里へいまの上山田温泉⁸を通り、平曲川に沿つて遠く西へ迂回するの⁴である。⁴そして武田軍は

同年八月二十四日、妻女山の西北方七キロの茶白山に着陣した（図次）。

この信玄の行動は何を意味したのか考える。まず、信玄が茶白山に陣取ったことと、茶白山の信玄本隊と海津城の三千の兵と妻女山の上杉軍を挟む形になった。このため、上杉軍本隊の退路を遮断することができた。さらに、越後から七十キロという上杉方の兵站の有利を封じたことにもなる。つまり、謙信が妻女山という敵地深くに陣取ることと、戦い

の主導権を信玄が奪い返したといえる。
 しかし、結局信玄は妻女山を挟撃しなかつ
 た。その理由は次のようである。「信玄には
 山を攻めようという意思はなかつた。謙信が
 妻女山に陣したのは、いわば背水の陣を布い
 たのである。その退路のない有為果敢の敵を
 攻めることが、いかに危険きわまりないかは
 孫子曰 呉子曰の説くところである。しか
 せん謙信は、もし信玄が妻女山に攻めかか
 くるならば、孫子曰も説くし呉子曰の兵

法にも言う「水を涉りて半ば渡れるをば撃つ
 べし」と、すなわち「半渡の戦法」をそのまま
 に、敢然と逆襲する決意を固めていた。武田
 軍が川を半ば渡った、陣形の乱れに出端を叩
 くのである。謙信、信玄の布陣後、両者が軍
 を動かさなかつたのは、両軍の勢力が十字のよ
 うに交差し、おり、双方が双方を挟撃するよ
 うな形であつた（図24）からだと書かれた本
 もあるが、僕はそれは違ふと思う。実際は、
 五杉方の挟撃はほとんど機能してゐなかつた

と推察する。ひとつは、兵力の問題である。武田軍の兵力が合計二万なのに對し、上杉軍は本隊八千と善光寺の後詰め五千の合わせて一万三千である。さらに妻女山の本隊は敵地にある上、兵站線が防がれている。信玄の兵力をもちこずれば、善光寺の上杉兵に對して数千の兵を茶白山に残して牽制し、残る一万数千で妻女山を攻めることぐらいできたとは推測する。結局、両者が行動を起こせなかつたのは、犀川と千曲川の合流する地が戦場

かあつたからだろう。

そのような理由で、五日間に渡つて対陣は続いた。しかし、糧食の余すところ、わづか十日を支うるのみであります。春白山の留守部隊二万を呼び寄せ、茶白山の背後を衝かせましょう。さもないと、このままでは味方の士気の衰えはとめられません⁴と上杉方の諸将は心配した。早くから布陣してゐる上、兵糧の補給が叶わず、不利な状況にあつて兵の士気も必至^{低下?}だからである。それでも陣を動

かさなかつた謙信に対し、信玄は八月之十
九日になつて突如海津城に入つた。

この行動にも二つの疑問がある。一つはな
ぜ信玄が海津城との挟撃態勢を解いたのかと
いうことである。これは、信玄のどつた作戦
であつたと僕は推察する。挟撃態勢を解くこ
とによつて妻女山の上杉軍の退路を解除する。
兵糧に困つていた上杉軍は越後へ帰国するか、
さうがむくとも善光寺へ撤退するであらう。
そこで、上杉軍が犀川を渡ろうとしたときに

二万の大軍をもつて上杉軍を側撃する。信玄はこういう意図をもつて海津城に軍を移動したのだと僕は考える。もう一つの疑問は、海津城に入るために千曲川を渡る武田軍をなぜ謙信は攻撃しなかつたのかということである。しかし、これは単に兵力の問題であろう。渡河する武田軍一万七千に対し、上杉軍八千では敵に損害を与える程度で、逆に海津城兵に横を突かれる危険性もある。そのため、謙信は半渡の戦法を使えなかつたと推測する。

三十三、啄木鳥戦法の検証

信玄が海津城に入つたから、
 した晩み合いは続いた。しかし、
 なつてようやく武田軍が動いた。信玄も謙信
 も、観天望氣に優れた者を陣中に伴つており、
 九月九日夜半から十日の朝にかけて濃霧が
 生ずることが分かつていた。信玄は、この霧
 を利用しようとしたのであろう。信玄が用い
 たのは、山本勘助が提案したとされる啄木鳥
 戦法である。別動隊に、夜半妻女山を奇襲さ

せ、負けを勝ちと見せ、山から下りてくるであろう。上杉軍を本隊が待ち構え、挟撃するといふ戦法である。(四二)。

妻女山奇襲の別動隊は、海津城主高坂弾正、馬場、飯富、真田、小山田、甘利ら一万二千の兵力である。別動隊は、月の入りを待つて十日午前十時頃に出発した。一方、信玄本隊八千の兵は、午前四時頃出発し、八幡原に陣取つた。

しかし、謙信は、海津城の炊煙が多く上が

うまいることから信玄のこの作戦を見破つて
 いた。そこで、別動隊到着の前に妻女山を払
 い、八幡原で待ち伏せているであらう信玄本
 隊にこちらから奇襲をかけることにした。全
 軍を夜半に妻女山から下ろし、雨宮の渡しを
 千曲川を渡り川中島へ出た。直江実綱は小駄
 荷を指揮して丹波島へ移り、甘糟長重は千の
 兵で千曲川左岸の東福寺付近に残り、別動隊
 に備えた。本隊は柿崎景家、本庄繁長を先鋒
 に七段の車懸りの陣を取った。対する信玄は、

別働隊の妻女山攻撃が午前六時、八幡原での
戦闘は午前八時頃と考えていた。また、敵を
包囲殲滅するためには鶴翼の陣を取っていた。
しかし、陣に厚みのない鶴翼の陣形では上杉
軍の奇襲に持ちこたえられぬはずがない。信
玄は戦闘開始直後、厚みのある十二段の構え
を立て直したが、上杉軍の猛攻により九段ま
では崩された。謙信と信玄の一騎打ちがあつ
たとしたら、おそらくこの頃であろう。敵の
中軍まで突破したものの、武田別働隊が到着

するまゝに決着をつけないと勝ち目はないと
 いう謙信の焦りが容易に推測できる。武田軍
 の別働隊が八幡原に到着したのは午前十時に
 なつてからである。川中島合戦凶屏風には、
 信玄の本陣に上杉軍が突入してゐる様子が描
 かれてゐるが、まさにこのような状況だつた
 のであらう。しかし、別働隊の到着により、
 兵力の少ない上杉軍は挟撃されると潰滅する。
 そのことを悟つた謙信は全軍に撤退を命じる。
 甲陽軍鑑によれば、合戦はつ巴の刻の末に終

る」とある。巳の刻とは午前十一時であるから、一時間という短い時間で謙信は退却を達げたことになる。謙信の戦いぶりは見事であつたといえる。なお、両軍の一連の動きについて、は四つを参考にしてほしい。

この戦いについて、は有名であるが、事実があるかどうかははっきりしない。武田軍の別働隊の行動に疑問点がある。午前一時、先発十隊が馬の口を縛り、足音を忍ばせ、闇をおかして海津城をあとにする。間道を西条村

から唐木道に登り、右に折れ、森ノ平に出、
 大嵐ノ峰を越え、妻女山を南から急襲するの
 である。⁴（四か）といふのが定説であつた。
 しかし、このコースは海津城から妻女山まで
 八キロ強あり、さらにその大半が山道である。
 山道での二列縦隊は不可能と考えると、一入
 一メートル、全体で十二キロの軍が時速二キ
 ロで行軍し、妻女山の急襲を完了するまでに
 十時間以上要する。午前六時の妻女山一斉攻
 撃は不可能である。そこで、僕は別動隊の奇

襲は妻女山の側撃を意味していたのではないかと推測する。海津城から、今の上信越自動車道松代PA辺りを通り、妻女山東麓の道島付近から山を登ったのだと考える(図27)。これだと、南迂回路よりも短距離で、山道も数百メートルなので、時間的問題はない。しかも、西側には登山口はなく、上杉軍は必然的に北に向かう山を下りることになる。これが僕の考える啄木鳥戦法の真相である。

啄木鳥戦法を讀まれどしまつたのは信玄が

あるが、謙信にも戦術的誤算があつた。別動
 隊への備えが甘糟部隊千の兵力を残しただけ
 であつたことである。ついは遊撃部隊とい
 える軍勢のほうの本隊より数が多いとは、お
 よそ戦理に反してゐる⁴が、敵の別動隊の兵
 力が一万二千とは分からなくて母一万に近い
 軍勢であることを察し、備えに三千の兵はつ
 けるべきであつた。さらに、三千の甘糟部隊
 は妻女山に残し、細い山道も登つてくる敵を
 攻撃していれば、母つと時間が稼げたと僕は

考える。以上が第四次川中島の戦いに関する考察である。

三―四、謙信と信玄の比較

第一次から第三次川中島の戦いにおいて、前述した通り、攻撃姿勢を見せたのは上杉方で武田方は決戦を避けるかのような動きをとった。一方、第四次川中島の戦いにおいては、両者ともにまず地勢戦を制し戦いを有利に進めようという意図があった。さらに、八幡原

どの決戦を仕掛けたのも信玄のほうである。
 つまり、弘治三年までの三度の戦いと永禄四
 年の戦いの間には、信玄の決戦決意の大きな
 変化があつたことが考えられる。一方、謙信
 も弘治二年までは、武田方に落ちた城を奪還
 するべく軍を起こしてゐるが、永禄四年には
 そうした武田方の諸城には目もくれず、早く
 から妻女山に陣を置いてゐる。謙信の行動に
 も変化がみられる。

このことから、弘治三年から永禄四年まで

の間、両者がそれぞれの事情を抱えることとなり、必然的に第四次川中島の戦いが起こつたと考えられる。つまり、第四次川中島の戦いにおける両者の戦争目的は、それまでの戦争目的とは異なるものであつたと僕は推測する。

第四章 合戦を通しこの両者の戦略

四一、謙信の場合

謙信の北信濃への戦略が見え始めるのは、弘治三年の第三次川中島の戦いの頃からである。第三次川中島の戦いでは、謙信は飯山城（図28）を拠点にして軍事行動を行った。また、弘治三年の合戦の後、（前略）景虎は飯山城を中心とする信越国境地帯を自己の支配下に置き（飯山領の誕生）、自分を頼つてきた北信濃の諸將の被官化にも成功していく。

とあり、高梨政頼の居城であった飯山城は、正式に上杉方の城となった。上杉方が戦略的拠点とした城として、野尻城があるだろう。

この二つの城は、春日山から川中島へ通ずる道の要所にあつた(図29)。そのため、北信濃だけみなく越後の防衛ラインとしても重要なだつたと考えられる。

しかし、謙信が飯山城の修築を開始したのは第五次川中島の戦いであつた永禄七年、つまり謙信は永禄十二年には飯山城・市川城と

ともにつ野尻新地への用心を油断なく行えと命令してゐる。信州口の飯山、市川、野尻の警備を増強させ、ことに野尻には新城を設けてこれに備えた。つとあり、野尻城の警備強化に至つては永禄十二年になつてから行われた。つまり、北信濃飯山の支配と防衛ラインの強化は、川中島の戦いの終盤から合戦後にかけて行われ、てゐるといふことである。それ以前は、川中島平に出陣して、も、敵方の城を攻撃するのみで、上杉方の城を強化したり、兵を

残したりすることはなかつた。そのため、謙信が信濃に出馬して来ると信玄が直接的な合戦を避けるため、一時的には謙信のほうが有利に見えるが、謙信が帰ると謙信の支配領域はこれまです以上に北に押しやられるという現象が起きた。しかし、弘治三年の第三次川中島の戦いの後から永禄年間にかけて、野尻、飯山領を死守している。戦略的にも、第三次川中島の戦いの頃に変化があつたと推測できる。

四一、信玄の場合

謙信が北信濃の實質支配をなかなか進めな
かつたのに対し、信玄は謙信との合戦ではな
く領土支配に重点を置いた。そのため、北信
濃の諸将に対し、工作を行ったり、従わない
武将に対しは攻撃を行ったりした。さらに、
川中島の合戦後も高坂弾正の部隊が残り、進
出を続けた。

しかし、永禄七年になると、武田軍は飯山
領を残し、越後に侵入する構えを見せまくる。

永禄七年（一五六四）、信玄は密使を会津
黒川の蘆名盛氏に派遣して、彼を北から越後
に侵入させ、自ら川中島方面より春日山城を
突き、越後を挟み撃ちする計画を立てた。三
月十八日、武田軍は越後の国境に近い野尻城
（上水内郡信濃町）を攻略し、越後領内に乱
入して村々を焼き払った。呼応した盛氏も四
月に軍を派遣して、越後菅名荘（新潟県五泉
市付近）に侵入させたが、慌てて帰国した謙
信の軍に敗れ去ってしまった。また野尻城も奪回

されたため、信玄の計画は失敗に終わった^レとある。計画こそ失敗に終わ^レるが、第五次川中島の戦いの頃には、越後侵入の意図を持^レていたと考えられる。また、永禄四年の第四次川中島の戦いの前に、永禄二年五月に信玄は松原諏訪神社（南佐久郡小海町）に願文を納め、信州奥部ならびに越後の境に軍を進めるが、敵城が自落し越後勢が滅亡するようにと祈り、具足一領などを献じた^レとあり、直後には、越中の神保氏と手を結んで越

後に乱入してゐる。

このことから、第三次川中島の戦いの後に、武田方にも戦略的变化が見られ、それは謙信の春日山城を視野に入れた戦略へと変化していったと推測する。

四一三、謙信と信玄の比較

両者の戦略の中で造られたり、修築が行われた城の特徴を比較してみよう。上杉方の城の特徴は、「月生城の」本曲輪（主郭）の南

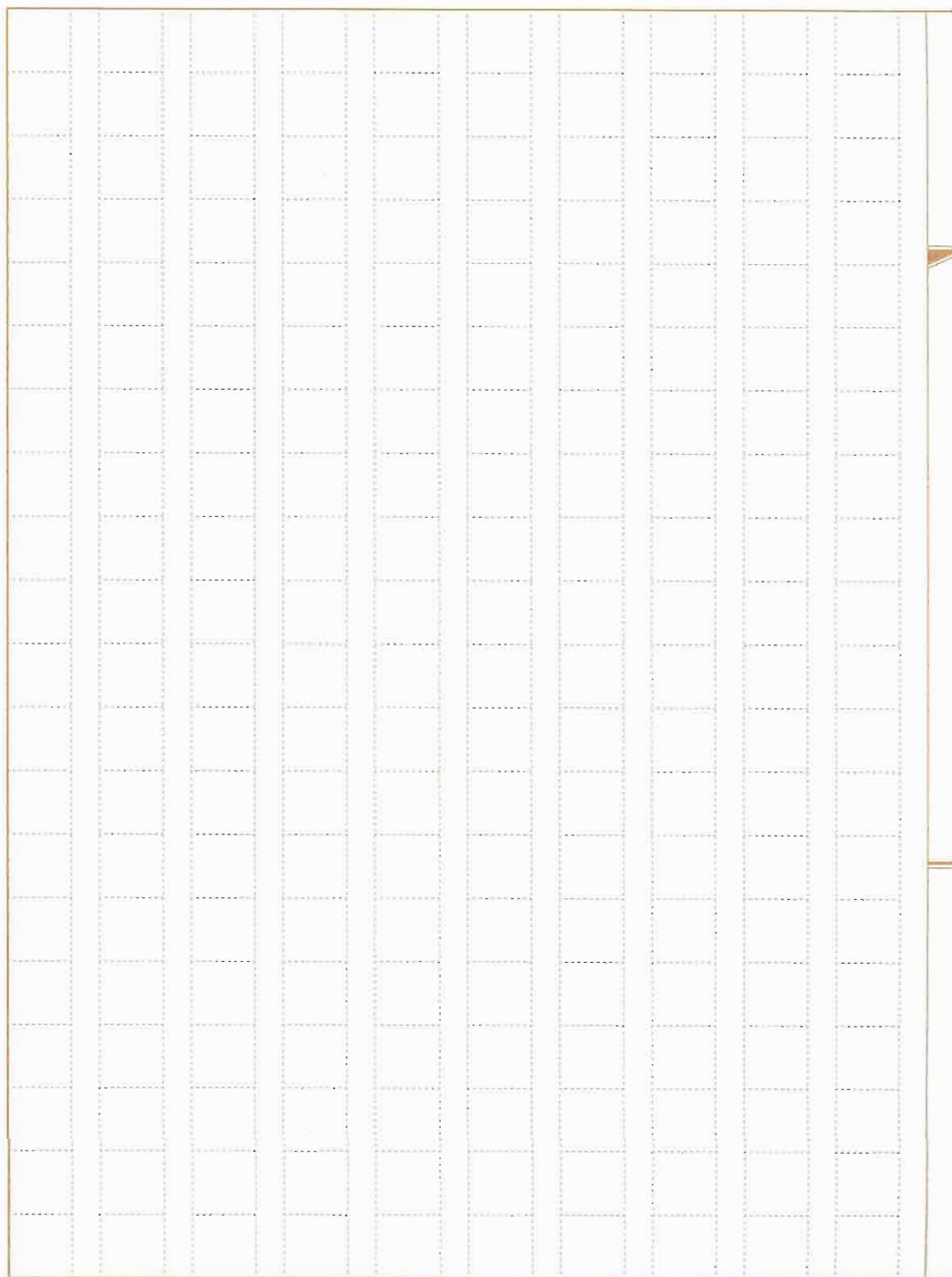
側の堀切は豎堀となり、畝状の堀が付随して
いる。これは、上杉方の築城方法である。ク
あるように、畝状豎堀である。これは、葛山
城や月生城に見られる(四三〇)。一方、武田
方の城の特徴は、三日月堀で、海津城や牧ノ
島城に見られる(四三一)。多くの本はここま
でしか書いていないが、ここから僕はひとつ
のことを考察する。

畝状豎堀は山城の防衛設備である。一方、
三日月堀は平山城、平山の防衛設備である。

北信濃の上杉方の城に畝状堅堀がよく見られるということは上杉方の城は山城が多いことを意味し、同様に武田方の城には平城が多いことを意味する。つまり、上杉方は山城を多く利用することと北信の防衛を強化していたのに対し、武田方は平城による北信の統治を重視していたと僕は推測する。

最後に、武田方が北信支配という戦略を有利に進められた理由を考察する。甲相駿三國同盟の一つの理由がある。しかし、越後勢が

積雪のために冬の間は出兵できない事も一つの理由だろう。こうして、戦略的に合戦を有利に展開したのは、信玄のほうであった。



―結論―

川中島の戦いを戦術面、戦略面から分析し
考察した結果、謙信も信玄も第三次川中島の
戦の後に変化があることが分かった。

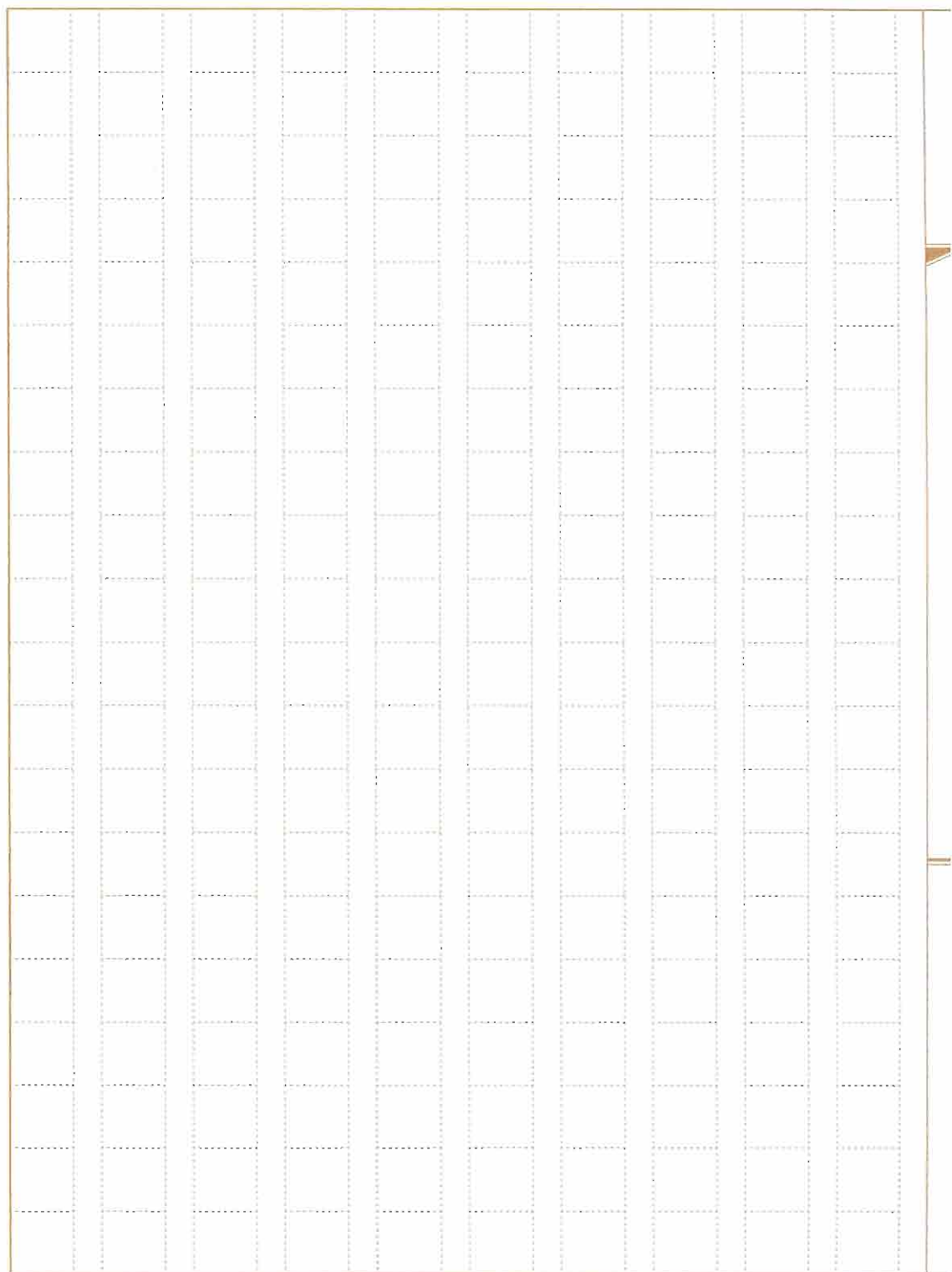
謙信の場合、三度めの合戦の後にあつた変
化とは関東出兵である。関東管領を譲り受け
た謙信にとつて関東の制圧は使命である。そ
のため、信玄との合戦に決着をつけ、長期
間関東に兵を出せる状況をつくる必要があつ
た。この時期の謙信の戦争目的は、もはや北

信豪族の救援などはなかつたのである。

信玄の場合、今川氏との関係悪化が変化の原因である。桶狭間の戦いで今川義元が戦死すると、信玄は上洛の道確保のため駿河侵攻を開始する。針路を大きく西へ転換させた信玄にとつて、後方の憂いがある越後の謙信は倒さなくともはならない存在となつた。こうして信玄も決戦決意が目芽えたのである。

つまり、第四次川中島の戦いの両者の戦争目的は、これまごとは全く違い、一方は関東

出兵、もう一方は上洛のために川中島での合戦に挑んだ。もはや、川中島の戦いは北信濃を巡るその争いではなかつた。僕はこう考えここに結論する。



1 参考文獻

1、戦国大名武田氏の信濃支配・笹本正治・名著出版・一九九〇年。

2、CG日本史シリーズ⑩激闘川中島・吉岡哲巨・双葉社・二〇〇九年。

3、第一次川中島合戦布施の戦いの地・シンボルトワー事業実行委員会・二〇一二年。

4、徹底分析川中島合戦・半藤一利・東京P
HP研究所・二〇〇〇年。

5、武田・上杉・真田氏の合戦・笹本正治。

宮帯出版社。二〇一一年。

6、川中島の戦いと北信濃。長野市民新聞編。

信濃毎日新聞社。二〇〇九年。

7、縄張図・断面図・鳥瞰図を見る信濃の山

城と館第二巻更埴・長野編。宮坂武男。戎

光祥出版。二〇一二年。

他、戦国大名勢力変遷地図。外川淳。日本実

業出版社。二〇一三年。

信濃路の風林火山。信濃毎日新聞社。二

〇〇六年。

他、探訪信州の古城。湯本軍一。郷土出版社。

二〇〇七年。

武田信玄の古戦場をゆく。安部龍太郎。

集英社。二〇〇六年。

川中島合戦再考。笹本正治。新人物往来

社。二〇〇〇年。

戦国合戦の真実。小和田哲男。小学館。

二〇〇九年。

地図で知る戦国上巻。地図で知る戦国編

集委員会。武揚堂。二〇一一年。

